

穂先の花

人を憎んでしまう時、みんな、どんなふうにしてその気持ちが消すんだろう。

あたしは思いつかない。

困っている。

憎むのがいけないことくらい、あたしだってわかっている。

でも、消えない。

苦しい。

わざわざ遠くまで、おいしいお菓子を買いに行ったり、ボーナスを奮発して洋服を買ってみたり、映画を見たりしたけど、おなかにたまったもやもやは、やっぱり消えない。

上生菓子も、スイーツも、その瞬間はすごくおいしくて、あたしも幸せになる。

「これで大丈夫」と、あたしも安心する。

でも夜になって、嫌な気持ちがまだまだ残っていることに気付くと、がっかりする。

お菓子でも洋服でも消えないと、使ったお金が、すぐくもつたない気持ちになる。

そして、そんなことをいじいじ考えている自分に、腹が立つ。

テレビを見ても、新聞を読んでも、散歩しても、どこかに残っている。

「なぜ、あんな人と仕事しなくちゃいけないんだろう」という気持ちと、「あたしも馬鹿みたい」という気持ちを重ねて、あたしはどうしていいかわからなくなる。

くだらないことで落ち込んでいる。

もちろん、仕事はしてます。

あの一番きらいな奴と。

「絶対咲かない花ってありますよね。」

飲んでいる時、突然後輩のひとりが言った。

今夜は打ち上げた。

後輩を三人連れて行った。

経費で落とせるはずもなく、あーあ、ボーナスの残りがまた減るよ、と私は心の中で愚痴を言う。

近頃の女の子はよく飲むあと、私は感心する。

以前は私もずいぶん飲んでいたはずだが、ビールの大ジョッキ一杯で、もうじゅうぶんだ。

さっさとご飯に焼き魚、辛子明太子を注文し、私ひとりが夕食だ。

後輩たちはまだ、ビールなのに。

「咲かない花？」

私は意味がわからず、オウム返しに聞いた。

「ほら、グラジオラスとか金魚草の先っぽのつぼみ、先輩は咲いたの、見たことありますか？」

「あれって、もともと咲かないんですか」

「そんなこと言われても知らないわよ」

ご飯をあわてて飲み込んで、私は答える。

「私、リンドウが全部咲いたの、見たことない。」
隣から低い声がする。

酔っ払っているわけでもないが、この後輩は、妙に落ち着いている。

あまり失敗しないから、仕事上は楽しさせてもらっている。

しかし、飲んでも楽しそうにもしない。

つまらなそうでもない。

こういう子は、いったい何が好きなのだろうかと考えながら、私は冷奴とモズクを頼む。

向かいの二人は、もう別の話で盛り上がっている。

「穂先の花かあ」

私は思わずつぶやく。

つぼみのまま。

色も淡い。

「でも、あれがないとしまらないですよね」
隣の後輩が言う。

「全部咲かなくてもいいのかもしれない。華やかでもないけれど」

「ねえ食べないの？」

私はだんだん気になってくる。

私の冷奴を少しつまんでいるだけの後輩が。

「いや、飲むだけでいいです」

「体に悪いから食べなさい。ほら、これもあげるから」

そう、あんたたちのおかげで、あたしは少し元気になったのよ。

自分が持っている嫌な感情って、花の穂先だと思えばいい。

花咲くこともない。

きれいな色でもない。

でもきつと、花には必要なんだろうね。

あの部分がないと、たしかにしまらない。

あってもいいんだね、憎むような感情も。

きつと。

優しい感情、幸せな感情、そういうものだけであたしが毎日生きているわけじゃない。

「あんなやつ駄目になってしまえばいいのに」

そんな感情は、花開きさえしなければいい。

つぼみのままでいてくれればそれでいい。

「先輩、これ頼んでいいですか？」

「わたしデザートにします」

よく食べる後輩にうなずき、財布の中身を気にして、あたしは泣き笑いになる。

明日は花屋にでも行ってこよう。

穂先の花でも探しに行こう。